

出題分析			
試験時間	60分	配点	60点
		大問数	2題
分量 (昨年比較)	[減少 同程度 増加]	難易度変化 (昨年比較)	[易化 同程度 難化]
<p>【概評】</p> <p>2025 年度入試から始まった社会科学部「総合問題」の 2 年目。総設問数は 1 問減ったが、本文と設問を合わせた総ページ数は 2 ページ分増加し、論述の合計字数も 230 字から 260 字へと増加した。難易度は、難しかった昨年と同程度。社会科学部の入試問題ということで、大問 I では病気の流行とも関係する歴史人口学的な話題の本文が 2 つ提示され、大問 II では高校の「政治・経済」カリキュラムでは習わない、生産の「迂回化」に関する経済理論を説明する本文が提示されていた。分量の長さからも、実質的に大問が 3 つあったとさえ言える。建前上は事前知識不要ということになっているが、「日本史」や「政治・経済」を履修していた受験生の方が、比較的スムーズに取り組める内容と言えた。</p>			

設問別講評			
問題	出題分野・テーマ	設問内容・解答のポイント	難易度
I	<p>A：江戸時代の死亡の季節型 (本文は、鬼頭宏『人口から読む日本の歴史』講談社、2000 年所収の文章より。)</p> <p>B：近代日本の死産率と新生児死亡率 (本文は、打越一哲「明治・大正・昭和戦前期における死産統計の信頼性」『人口学研究』第 49 号、2013 年所収の文章より。)</p> <p>(※A と B の各設問には、別の出典からの図表引用もあり。)</p>	<p>問題文はともに人口統計に関する内容。なお 2026 年がまさに「丙午」の年に当たっている。問 1 は出だしから論述問題だが、図 1 から M 字型パターンが徐々に落ち着いたこと、図 2 から黒塗りの項目がなくなったことなどを読み取り、まとめる。問 2 は「100」の超過部分の面積や 5 月の値などで判断。問 3 には古文読解の要素があった。c の「手判」は「はしかの神」のもの、f は、話の舞台は「八丈嶋」で、「神となった」も記述がない。問 4 は、「米の二期作」がこの時代に行われることはないのだから(4)は誤りなのだが、日本史や地理の事前知識がないと判定できない。(5)を「米不足」の記述と連動させる。問 5 は比較的易しい。問 6 は、「同一のウイルス」であれば一度かかった人は免疫を獲得することを想起する。問 7 の各文には迷う要素も多いので、確実に正しいと言える文を確定させ、残りを選ぶ。問 8 の e は、1906 年には出生の届出が少なくなるので、母数が減ることで両指標は「高く」計算されると考える。</p>	やや難

設問別講評			
II	<p>迂回生産をめぐる経済理論</p> <p>(本文は、森嶋通夫『思想としての近代経済学』日本放送出版会、1993年所収の文章より。)</p>	<p>経済理論の話であり、利子率と連動する「現在価値」を正しく理解しておくことが、全体の理解のために特に重要と言えた。問1は対応する本文の段落と丁寧に照合する。問2は利子率が0の場合と高い場合のAおよびBの利潤率を比べる。問3は前の段落の内容を踏まえて選ぶ。問4は、傾向線が右下がりのC国だけが下線部(イ)の記述と合致することを踏まえ、冷静に選ぶ(なお、仮にaが正解だった場合には、bやcも正解という選択肢だった)。問5は比較的易しい。問6は、指定字数は200字以内と多いが、そのぶん余裕のある論述が可能となる。設問に書かれた条件と本文の内容を丁寧に読み込み、「工場生産」以外の「迂回化の例」を書いていく。</p>	やや難
合格のための学習法			
<p>「社会科学」の範囲は広く、日々の着実な読書を通じて、「社会科学の女王」と言われることもある経済学のほか、歴史学・政治学・哲学・統計学など、様々な学問でどのような考え方がなされているのか、幅広い教養を事前に身に付けておく必要がある。「基本的に知識不要の読解問題なのだから、現代文や小論文が得意であれば解けるだろう」とタカをくくっていると、題材や本文の難解さを前に痛い目を見る。数は少ないが「サンプル問題」や本試験の過去問(社会科学部だけでなく政治経済学部の「総合問題」大問Iも有効)を何度でも入念に研究し、秋頃に実施の模擬試験も確実に受けておく必要がある。日頃の勉強では、高校での地歴公民系の各授業を大切にしておくことも重要。また岩波新書や中公新書など、社会科学系的话题を扱った様々な新書版書籍を習慣的に読んでおくことも、義務として自分自身に課しておこう。</p>			